

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No.145 June 2016

研究の最前線

◆ 2016年度夏期国際シンポジウム “Russia's Far North: The Contested Frontier”の予告 ◆

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 2016年度夏期国際シンポジウム
Hokkaido University Slavic-Eurasian Research Center 2016 Summer International Symposium

Russia's Far North: The Contested Frontier

ロシア極北: 競合するフロンティア

PROGRAM

DAY.1 July 7 (Thu)

Session 1 10:00-12:00
White Ice into Black Gold: Economy and Development in the Far North
Speakers: Lassi HEININEN (University of Jyväskylä, Finland),
MOTONOBU Wakumu (JOSCEI),
Jiu Xu (Jiamusi University of China, China)
Discussant: Pasi ALTO (University of Tampere, Finland)
Chair: TABATA Shinichiro (JOSCEI)

Session 2 13:00-15:00
Peoples of the Far North: Local, National and Transnational Perspectives
Speakers: Arbakhan MAGOMEDOV (Lomonosov State University, Russia),
GOTO Akasue (JOSCEI),
Tobias HOLZLEHNER (Martin Luther University of Halle-Wittenberg, Germany)
Discussant: TAKAKURA Hiroki (Tohoku University)
Chair: Hyyujoo Naomii CHI (Hokkaido University)

Session 3 15:30-17:30
The New Northeast Passage: Nature, Shipping and Trade in North Asia
Speakers: FURUICHI Masahiko (Kyoto University),
DAISU OKTSOMKO (University of Helsinki, Finland),
OTSUKA Natsuhiko (North Japan Port Consultants),
Discussant: HITAGAWA Hiroshi (Osaka Policy Research Institute),
Veli-Pekka TYKKÖNEN (University of Helsinki, Finland)
Chair: ADICHI Yuko (Sophia University)

DAY.2 July 8 (Fri)

Session 4 10:00-12:00
Selling the Arctic: The Uneasy Coexistence of Business Ventures and Environmental Concerns
Speakers: Veli-Pekka TYKKÖNEN (University of Helsinki, Finland),
TORIUNAGA Masahiro (Nanzan University),
Eini HAAJA and Hanna MARINEN (University of Turku, Finland)
Discussant: KATAYAMA Hirofumi (GE Global University),
Chair: David WOLFF (JOSCEI)

Session 5 13:00-15:00
Russian Diplomacy Heads North: Bilateralism and Multilateralism
Speakers: Alexander SERGUNIN (St. Petersburg State University, Russia),
Paavo RÄSÄY (Peace Research Institute OSL, Norway),
Discussant: MASHITA Akihiro (JOSCEI),
Chair: ORENZINI Fulvio (Nihon University)

Session 6 15:30-17:30
Literary, Visual, and Political Images of Russia's Far North
Speakers: Otto BOELE (Leiden University, The Netherlands),
Dmitry BARANOV (Russian Museum of Ethnography, St. Petersburg, Russia),
Seiji KIEDA (Osaka School of Economics, Japan),
Discussant: KOSHINO Go (JOSCEI),
Chair: SAGAMI Shiro (National Museum of Ethnology, Japan)

Language: English
使用言語: 英語

日時・場所
2016
7月7日(Thu)・8日(Fri)
北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター (SIC)
4号 大会議室 (403)

ACCESS MAP

北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター
主催 北海道大学 国際関係学系 国際学 講座
電話 | 011-706-2388 代表 連絡先 FAX | 011-706-4952
eメール | jenslav@hokudai.ac.jp | hre@hokudai.ac.jp
共催 フィンランドとの二国間交流事業共同研究「ロシア最後のエネルギー・フロンティア: 極北地域の持続的発展への挑戦」(日本学術振興会、フィンランドアカデミー)
後援 地域研究コンソーシアム、北海道大学北極圏研究センター

今年度の夏期国際シンポジウムは、7月7日(木)～8日(金)にセンター大会議室でおこなわれます。今年のテーマは、ロシアの極北です。センターでは、日本学術振興会のフィンランドとの二国間交流事業として、「ロシア最後のエネルギー・フロンティア: 極北地域の持続的発展への挑戦」と題する共同研究が2014年から2年間の予定でおこなわれてきました。このプロジェクトにより、フィンランドの研究者とともに、ロシアのアルハンゲリスク市、ムルマンスク市、ヤマロ・ネネツ自治管区などの現地調査をおこないました。今回の国際シンポジウムは、この共同研究の成果を発表する場となっています。また、このプロジェクトのメンバーではない、ロシアをはじめとする第三国の研究者にも報告をお願いします。さらに、いっそう学際的な視点からロシア極北を考察するために、ロシア極北のイメージを語るようなセッションも設け

ました。様々な専門分野の研究者に興味を持っていただけるのではないかと考えております。昨年4月に、北大では北極域研究センターが設立されました。このセンターは、今年4月に国立極地研究所国際北極環境研究センターや海洋研究開発機構(JAMSTEC)北極環境変動総合研究センターとともに、北極域研究共同推進拠点を形成しています。そして、この3つのセンターが、昨年度から開始された北極域研究推進プロジェクト(ArCS)を共同で進めています。従来の北極域研究は自然科学が中心だったわけですが、昨年来のこのような新しい動きのなかでは、自然科学と人文社会科学の両者による北極域研究の推進が大きな目標の一

つとされています。北極域における人間の活動の6割がロシアに関わるものであることから、北極域研究はロシア研究者のサポートを必要としています。今回の国際シンポジウムは、様々な分野の北極域研究者とロシア研究者との出会いの場となることを期待しております。[田畑]

Venue: Room 403, Slavic-Eurasian Research Center (SRC), Hokkaido University, Sapporo

July 6 Wed.

16:30- Young researchers' seminar

July 7 Thu.

10:00-12:00 Session 1: White Ice into Black Gold: Economy and Development in the Far North

Chair: Tabata Shinichiro (SRC)

Lassi Heininen (University of Lapland), "The Nexus of Resource Geopolitics, the Environment, Security and Resilience in the World of 'Wicked' Problems"

Motomura Masumi (JOGMEC), "Perspectives of Oil and Gas Development in the Russian Arctic"

Liu Xu (Renmin University of China), "China's Arctic Policy and Its Implication for China-Russia Relations"

Discussant: Pami Aalto (University of Tampere)

13:00-15:00 Session 2: Peoples of the Far North: Local, National and Transnational Perspectives

Chair: Chi Naomi (Hokkaido University)

Arbakhyan Magomedov (Ulyanovsk University), "Russian Nationalism and Arctic Aborigines: Growing Pressure to Indigenous Communities (Some Comparison with the North Caucasus)"

Goto Masanori (SRC), "Cutting through Channel: Local Entrepreneurship of Indigenous Actors in the Arctic Russia"

Tobias Holzlehner (Martin Luther University Halle-Wittenberg) "Hunters and Traders in a Fluid World: Towards a Maritime Anthropology of Northeast Russia"

Discussant: Takakura Hiroki (Tohoku University)

15:30-17:30 Session 3: The New Northeast Passage: Nature, Shipping and Trade in North Asia

Chair: Adachi Yuko (Sophia University)

Furuichi Masahiko (Kyoto University), "Container Quick Delivery Scenario by the NSR/SCR-combined Shipping: How Can the Arctic Shipping Be More Competitive in the Age of Mega-ships?"

Daria Gritsenko (University of Helsinki), "The Structuration Approach to Arctic Seaport Development: The Case of Sabetta"

Otsuka Natsuhiko (North Japan Port Consultants)

Discussants: Veli-Pekka Tynkkynen (University of Helsinki); Kitagawa Hiromitsu (The Ocean Policy Research Institute)

July 8 Fri.

10:00-12:00 Session 4: Selling the Arctic: The Uneasy Coexistence of Business Ventures and Environmental Concerns

Chair: David Wolff (SRC)

Veli-Pekka Tynkkynen (University of Helsinki), "Greening Regional Energy Policies in the Russian Arctic? Encountering State Energopower in Archangelsk and Karelia"

Tokunaga Masahiro (Kansai University), "The Environment Discourse on Russia's Arctic Area"

Eini Haaja and Hanna Mäkinen (University of Turku), "Perceptions of Finnish Maritime and Offshore SMEs on the Russian Arctic"

Discussant: Katayama Hirofumi (J. F. Oberlin University)

13:00-15:00 Session 5: Russian Diplomacy Heads North: Bilateralism and Multilateralism

Chair: Ohnishi Fujio (Nihon University)

Alexander Sergunin (St. Petersburg State University), "Russia's Arctic Strategies in the Wake of the Ukrainian and Syrian Crises"

Pavel Baev (Peace Research Institute Oslo), "Examining the Sustainability of Russian Military-security Policies and Programs in the Arctic"

Discussant: Iwashita Akihiro (SRC)

15:30-17:30 Session 6: Literary, Visual, and Political Images of Russia's Far North

Chair: Sasaki Shiro (National Museum of Ainu Culture Preparation Office)

Otto Boele (Leiden University), "The Far North in Russia's Fin-de-Siecle Imagination: Borisov, Briusov and Bal'mont (1890-1917)"

Dmitry Baranov (Russian Museum of Ethnography), "The Image of the Russian North in the Artworks of Ivan Bilibin"

Sergei Medvedev (National Research University Higher School of Economics), "Arctic Legacy as a Symbolic Resource in Russian Politics"

Discussant: Koshino Go (SRC)

◆ 共同研究員 ◆

2016年度から2年間の任期で、センター共同研究員になっていただく方々は以下のとおりです。(五十音順)。なお、2015年度から2年間の共同研究員については、センターニュース第141号をご覧ください。[事務係]

共同研究員 (一般)

青島陽子 (神戸大)、麻田雅文 (岩手大)、天野尚樹 (山形大)、荒井幸康 (亜細亜大)、シュラトフ、ヤロスラブ (広島市立大)、中村靖 (横浜国立大)、日臺健雄 (埼玉学園大)、兵頭慎治 (防衛省防衛研究所)、堀江典生 (富山大)、永山ゆかり (北大大学院文学研究科)

地域比較共同研究員

前田しほ (東北大)

境界研究共同研究員

池ノ上真一 (北海道教育大)、井竿富雄 (山口県立大)、伊藤融 (防衛大)、井上暁子 (熊本大)、川久保文紀 (中央学院大)、木山克彦 (東海大)、黒岩幸子 (岩手県立大)、小池康仁 (法政大)、ゴルノフ、セルゲイ (九州大)、佐藤学 (沖縄国際大)、田村慶子 (北九州市立大)、花松泰倫 (九州大)、福原裕二 (島根県立大)、藤森信吉、古川浩司 (中京大)、水谷裕佳 (上智大)、三村光弘 (環日本海経済研究所)、山上博信 (日本島嶼学会)、山崎孝史 (大阪市立大)、山田吉彦 (東海大)、屋良朝博

◆ 公開講座「スラブ・ユーラシア社会におけるジェンダーの諸相」開講中 ◆

今年度の公開講座は「スラブ・ユーラシア社会におけるジェンダーの諸相」と題して、社会主義期から現在に至るまでのこの地域における女性および男性のあり方、およびその多様性や変化についての講義をおこないます。「総合人文社会」の分野に属するジェンダーの問題を、これも「総合人文社会」の分野に属する地域研究の視点を軸に、政治や経済、歴史、宗教、日本との比較など多面的な角度から検討します。[仙石] (編注:公開講座は5月に終了しました)

日程	講義題目	講師
第1回 5月9日(月)	女たちの祈り：女性が支え、男性が司る正教会の現在と歴史	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 助教 高橋 沙奈美
第2回 5月13日(金)	バルト諸国の男女間格差、女性間格差：構造と認識から考える	早稲田大学教育・総合科学学術院 教授 小森 宏美
第3回 5月18日(水)	チェコと日本：少子化とジェンダー役割	明治学院大学国際学部 教授 中田 瑞穂
第4回 5月20日(金)	現代ロシアの労働とジェンダー	大阪大学言語文化研究科 教授 藤原 克美
第5回 5月23日(月)	真実を求めて：ノーベル賞受賞作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチの世界と女性たちの「声」	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 共同研究員 中地 美枝

第6回	5月27日(金)	現代ロシアの家族政策：国家における「母」の役割を中心に	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 助教 油本 真理
第7回	5月30日(月)	東欧における女性の現状：データをもとに考える	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授 仙石 学

◆ アレクサンドル・ドゥリチェンコ教授の特別講演会 ◆

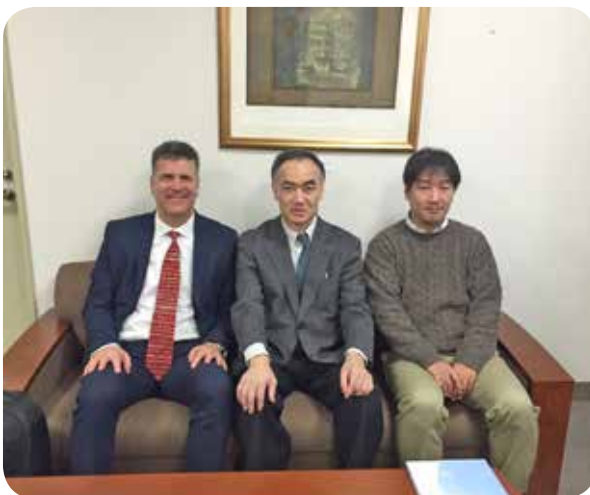


ドゥリチェンコ先生を囲んで。向かって左から越野研究員、キム特任教授、ドゥリチェンコ教授、カラダロフ特任教授、橋本教授

におけるスラブ・マイクロ言語文化研究という現象」(3月18日：於東京) というもので、これらはまさにドゥリチェンコ氏の研究成果の神髄と言うべき内容でした。なお、東京での講演会の原稿は、日本スラヴ学研究会の会誌「スラヴ学論集」第20号に掲載予定です。[野町]

北海道大学とタルトゥー大学(エストニア)との大学間協定に基づき、タルトゥー大学教授で、世界的に著名なスラブ語学者アレクサンドル・ドゥリチェンコ氏をお招きし、札幌と東京で各1回講演会を組織しました。ドゥリチェンコ氏の専門領域は理論言語学、社会言語学、言語学史など大変広いのですが、なかでもスラブ系少数民族による文章語形成の研究で知られ、1980年代から既に当該分野の権威として活躍されています。今回の講義はそれぞれ「マイクロ文章語：現代スラブ世界における新しい言語範疇」(3月14日：於札幌)、「現代スラブ学

◆ ロバート・グリーンバーグ教授の特別講義 ◆



向かって左より、グリーンバーグ教授、田畑センター長、筆者

学内公募「2015年度トップランナーとの協働教育機会拡大支援事業」が採択されたのをうけ、世界のトップ研究者との共同研究・教育を発展すべく、南スラブ諸語を題材とした社会言語学で著名なロバート・グリーンバーグ教授(オークランド大学、ニュージーランド)を招へいし、連続講演会をおこないました。題目はそれぞれ「高等教育における人文学・社会科学の地位の主張：アメリカ合衆国とニュージーランドの視点」および「いかに言語学的分析をインパクトあるものにするか：スラブ諸語研究への学際的アプローチ」というものでした。前者は大学

運営にも関わる話ですが、グリーンバーグ教授はオークランド大学で文学部長を務められており、文系学問の維持・発展に日々取り組んでおられます。文系学問の危機が叫ばれる昨今、教授の新たな「専門分野」のお話は大変参考になるものでした。2回目の講演会は、南スラブ諸語研究というご自身の専門領域が、いかに学際的研究の可能性を秘めているかということ、これまでのご自身の研究成果をもとに具体的にお話になりました。グリーンバーグ教授の滞在は僅か4日でしたが、講演会に加え、北大との交流を発展すべく5件のビジネスミーティングをおこなうなど大変充実した滞在になりました。[野町]

◆ Association for Borderlands Studies (ABS) リノ大会開催される ◆

北米およびメキシコを基盤とする境界研究の国際学会であるABSのリノ大会が4月13日～16日の日程でネヴァダ州リノ市のSierra Grand Resortにて開催されました。センターからは岩下明裕(UBRJユニット代表)、地田徹朗、そして、大学院文学研究科博士課程のアリベイ・マムマドフが参加しました。



北大公共政策大学院の池直美、九州大学からはセルゲイ・ゴルノフ、テッド・ボイル、花松泰倫、東フィンランド大学のユッシ・レーン(ABS事務局長)など、センターと馴染みの深い面々も参加しました。本大会にて、岩下明裕教授は一年間のABS会長職の任期が満了となりました。また、ABS理事会にて、昨年11月に暫定発足した境界研究日本部会をベースに、ABS日本部会を発足させることが正式に決定されました。UBRJでは今後ともABSやBRITなど世界のボーダースタディーズ・コミュニティとの協働を続けてまいります。[地田/岩下]

アリベイ・マムマドフによる質疑への回答の様子

◆ 『境界研究』6号刊行 ◆

年度末に『境界研究』6号が刊行されました。巻頭に政治地理学的世界的権威であるジョン・アグニュー卓越教授による2015年11月の九州大学での「グローバル化時代の地政学」と題する特別講義の記録が掲載され、それ以外にも、論文3本、研究ノート2本、書評3本が収められています。すべての論考がこちらのウェブページからダウンロード可能です。[地田]

<http://src-home.slav.hokudai.ac.jp/publictn/JapanBorderReview/no6/index.html>

[特別講義]

ジョン・アグニュー(川久保文紀訳) グローバル化時代の地政学

[論文]

- 佐藤考一 2014年のパレル諸島沖での中越衝突事件の分析
- 王柳蘭 雲南系ムスリム・ディアスポラの境界維持にみる葛藤と多元的結合
- 井濶裕 日持上人の権太布教説をめぐる：帝国日本における北進論の特質と影(1)

[研究ノート]

- 今井宏平 トルコにおける地政学の展開：国家論と批判の狭間で
- アリベイ・マムマドフ 北方領土問題をめぐる日本人元島民・後継者のアンケート調査

[書評]

- 前田 幸男 アレクサンダー・C・ディーナー、ジョシュア・ヘーガン著(川久保文紀訳)『境界から世界を見る：ボーダースタディーズ入門』
- 金山浩司 辛島理人著『帝国日本のアジア研究：総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』
- 山上 博信 小池康仁著『琉球列島の「密貿易」と境界線：1949-51』

◆ Eurasia Border Reviews 6(1) 刊行 ◆

境界研究ユニット (UBRJ) が刊行する英文学術誌である *Eurasia Border Review* の Vol. 6, No. 1 が刊行されました。今号より年1回刊行に戻ります。論文3本、研究ノート1本、書評1本の他、境界をめぐる事象についてアクチュアルな知見・視座を提供する「視点 (perspective)」というコーナーが新たに設けられ2本が収められています。また、2015年3月に九州大学に新設された境界研究の拠点である、九州大学アジア太平洋未来研究センター (CAFS) の設立シンポジウムでのラウンドテーブルの様子も収録されています。すべての論考がこちらのウェブページからダウンロード可能です。[岩下]

http://src-home.slav.hokudai.ac.jp/publicn/eurasia_border_review/vol6no1.html

<Articles>

Mikhail A. Alexseev Blocs, States, and Borderlands: Explaining Russia's Selective Territorial Revisionism

Minori Takahashi The Politics of the Right to Self-Determination: Reframing the Debate on Greenland's Autonomy

Tomás Cuevas Contreras An Approach to Medical Tourism on Mexico's Northern Border

<Research Note>

Assel Bitabarova Contested Views of Contested Territories: How Tajik Society Views the Tajik-Chinese Border Settlement

<Perspective>

Marek Menkiszak Borders in Flux: Ukraine as a Case Study of Russia's Approach to Its Borders

Zhao Huasheng Sino-Russian Economic Cooperation in the Far East and Central Asia Since 2012

<Roundtable>

The Future of Border Studies in the Asia Pacific: Center for Asia-Pacific Future Studies 1st Symposium (March 7-8, 2015, Fukuoka, Japan) "Reshaping Border Studies in Asia and the Pacific"

<Book Review>

Franck Billé Godfrey Baldacchino (ed.), *The Political Economy of Divided Islands: Unified Geographies, Multiple Politics*, Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan: 2013. 288pp.

◆ 専任・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

2月5日：仙石学 『『ポストネオリベラル』期の年金制度？：中東欧諸国における多柱型年金制度の再改革』

コメンテータ：平田武（東北大学）

提出されたペーパーは中東欧諸国の年金制度改革を、ネオリベラリズムへの反発という共通の文脈において南米諸国との比較を視野に入れながら分析したものです。コメンテータの平田氏は各国の差異を国内政治的要因で丁寧に説明する手法を肯定的に評価しました。（ポスト）ネオリベラリズムという概念を用いることの是非、バルカンなど隣接地域との比較の必要性などについて活発な議論が交わされました。[越野]

2月8日：田畑伸一郎 「ロシア経済の変動：新しい成長モデルの模索」

コメンテータ：金野雄五（みずほ総合研究所）

今回提出された論文は、油価高騰による経済成長が終わったロシア経済が、どのように変化し、今後どのようになるかを分析するもので、ロシア経済が「オランダ病」から解放され、「輸入代替」にシフトせざるを得ないというのが田畑氏の見解でした。コメンテータの金野氏からは、全体として田畑氏の分析結果を支持されましたが、2015年の輸入代替はルーブル下落

に基づく自然発生的で限定的なケースである可能性が論じられ、輸入代替の必要条件をさらに踏み込んで分析する必要があるなどの指摘がなされました。出席者からは多くの質問がでしたが、例えば、輸入代替による現状緩和があったとしても、経済成長につながるか、ロシア経済発展に中国の市場が必要かどうかなど討論が充実しました。[野町]

2月24日：家田修「東欧スラブ地域から災害復興のレジリエンスを考える」

コメンテータ：西芳実（京都大学）

今回提出されたペーパーは、ウクライナ研究者セルヒー・チョーリー氏との共著論文で、ハンガリーのアイカ赤泥流出事故と旧ソ連のチェルノブイリ原発事故を、「レジリエンス（回復力）」という視点から、災害を認定する専門家の役割、復興住宅問題を分析するものでした。また、これらの事例から得られた教訓が日本の災害にいかにかきかされるかということも念頭に置かれていました。コメンテータは災害復興の研究を専門とする西氏で、東南アジアの事例などを挙げながら、レジリエンスというアプローチの有効性が論じられた一方、この点においてスラブ・ユーラシア地域らしさとは何かといった根本的な問いも出されました。出席者からは、二つの異質で時代も異なる事例を同時に扱うのが妥当か、日本への応用がどれぐらい現実的かといった意見が出されました。[野町]

3月30日：野町素己“On the Second Be Periphrasis (BE-2) in Kashubian: Its Grammatical Status and Historical Development”

コメンテータ：服部文昭（京都大学）

今回提出されたペーパーは、カシュブ語動詞の迂言形式の一つ「Be+ 過去分詞長語尾形」を通時・共時の双方から分析するものでした。特に言語接触が果たした役割と言語構造の文法化という側面に注目し、現代語においては当該構文が通説通りの完了形式ではなく、結果相を表す構文であることが示されました。コメンテータの服部氏および出席者からは、フィールドワークで集めた現代語データと従来使用されなかった通時資料を用い、言語類型論の視点から分析したことで、従来の時制システムの記述方法に新しい可能性を見出した点などが評価されました。[野町]

3月31日：宇山智彦「近代帝国間体系の中のロシア：ユーラシア国際秩序の変革に果たした役割」

コメンテータ：長縄宣博（センター）

ロシア帝国がユーラシア地域の歴史において果たした役割を対外関係に焦点をあてながら論じたものです。モンゴル帝国時代から現代までの8世紀にわたる長大で複雑な歴史的経緯が最新の先行研究を取りいれながらバランスよく簡潔に記述されている点が高く評価されました。グレートゲームをユーラシア全域における諸帝国の競合として再定義しようとする試み、通史における主体（ロシア）の一貫性の問題、軍事・外交と経済の関係などが議論されました。[越野]

4月25日：高橋沙奈美「レニングラードの福者クセーニヤ：社会主義的近代化と聖人崇敬」

コメンテータ：藤野陽平（北大大学院国際広報メディア・観光学院）

提出されたペーパーは、帝政期の聖者崇敬がソ連時代に被った変容を戦後の雪解け期を中心にして論じたものです。社会主義体制下の組織宗教の弱体化によって、民衆宗教としてのクセーニヤ崇敬が形成されたという興味深い論証がなされています。コメンテータの藤野氏は民衆とエリートという対立軸の複数性を指摘し、日本や他の地域の宗教との比較研究の可能性を示唆しました。社会主義的近代化という用語の是非、民衆のリテラシー、ジェンダー的な観点などをめぐって活発な議論が交わされました。[越野]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 144 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]

- 2月 4日 世界経済外交大学(ウズベキスタン)・北海道大学・国際共同セミナー Tulkin Atamurodov(世界経済外交大)、Sanjar Kholbaev(同)、Bakhtiyor Islamov(北大・経)「ウズベキスタンにおける体制転換と持続的開発」
- 2月 16日 藤代節(神戸市看護大)「20世紀初頭トウルハンスク地方のドルガン語形成事情について」(客員研究員セミナー)
笹山啓(東京外国語大・院)「きわめて個人的な救済へむけて：V・ペレーヴィンの自我論」(ユーラシア表象研究会)
- 2月 17日 「近現代ロシアにおけるスポーツ表象の諸相と系譜」研究会 大平陽一(天理大)「帝政ロシアおよび在外ロシアにおける《ソコル》：体操運動と民族主義、汎スラヴ主義」；岩本和久(稚内北星学園大)「ロシアの現代美術とスポーツ」
- 2月 18日 UBRJセミナー「越境する中東難民と欧州安全保障」鈴木一人(北大・法)「難民流入がもたらす欧州の安全保障上のインプリケーション」；樽本英樹(北大・文)「ヨーロッパ難民危機と越境移動」
- 2月 19日 キム・スファン(センター)「文化記号論から見た韓国ポップカルチャー：ユーリー・ロトマンの異文化コミュニケーションの仕組みについて(英語)」；Kseniia Galiaeva(ウイレム・デ・クーニング・アカデミー、オランダ)「非在の地所：記号圏としてのダーチャ(別荘)(英語)」
- 2月20-21日 プロジェクト研究会「ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究」高橋沙奈美(センター)「救世主としての最後の皇帝ニコライ二世」；井上岳彦(札幌学院大)「ヴォルガ下流域における宣教師と現地民による文通」；村上志保(立命館大)「中国におけるプロテスタント教会：政治的圧力と教会の受容・変容」；深堀彩香(愛知県立芸術大)「音楽面からみるイエズス会の東洋宣教：16世紀半ばから17世紀初期におけるゴア、日本、マカオを対象として」；井上貴子(大東文化大)「南インドにおける教会と聖歌：公共圏論をてがかりに」；松川恭子(甲南大)「インド・ゴアにおける聖人信仰の現状」
- 2月 23日 古川浩司(中京大)「北海道・ロシア(サハリン州)の地方間交流の比較分析：根室と稚内」(客員研究員セミナー／UBRJセミナー)
- 2月 27日 アントレプレナーシップ研究会 後藤正憲(センター)「チュヴァシの農業再編における協同組合と自営農家」；辛嶋博善(センター)「家業と企業の間：モンゴル牧畜民とアントレプレナーシップ」；佐久間寛(東京外国語大)「首長、組合、モラル：西アフリカ農村社会におけるアントレプレナーシップ」；深田淳太郎(三重大)「西太平洋の遠洋航海『社』：貝殻交易の歴史と革新から見るアントレプレナーシップ」
International Seminar: Current Change from Cooperation into Confrontation?: Security Environment in the Arctic Region 大西富士夫(日本大)“Why Arctic Security Matters Now: An Introductory Comment”；Andreas Østhagen(ノルウェー防衛研究所)“Arctic Security: A Tale of Two Worlds?”；Rob Huebert(カルガリー大、カナダ)“It Never Really Was about Cooperation...: The Impact of the Core Security Needs of the Great Powers on the Arctic”；Katarzyna Zysk(ノルウェー防衛研究所)“Russia and the Arctic: Territory of Dialogue and Militarization”；Marc Lanteigne(ノルウェー国際関係研究所)“Musings of a Near-Arctic State: China’s Circumpolar Strategies”
- 3月 3日 中地美枝「ブックトーク *Reproductive States: Global Perspectives on the Invention and Implementation of Population Policy* (New York: Oxford University Press, 2016), eds. Rickie Solinger and Mie Nakachi」(UBRJセミナー)
- 3月 10日 Tokhir Kalandarov(センター)「パミールのイスマーイール派ムスリム：ライフサイクルの民族学(ロシア語から通訳有)」(北海道スラブ研究会)
- 3月 14日 Aleksandr Duličenko(タルトゥー大、エストニア)「ミクロ文庫語：現代スラヴ世界における新しい言語範疇(ロシア語)」(日本スラヴ学研究会特別講演会)
- 3月 15日 ワークショップ「中世スラヴテキストへの新たなアプローチ」Alexandre Bobrov(ロシア科学アカデミー文学研究所)“Новозаветные апокрифы в версиях Ефросина Белозерского”；三浦清美(電気通信大)“К вопросу о древнерусском мифотворчестве и религиозном воображении в мире славянских средневековых апокрифов”；服部文昭(京都大)“Слово о двенадцати снах Шахаиши”；Anisava Miltenova(ブルガリア科学アカ

- デミール文学研究所)“Medieval Texts with a Multilingual Tradition: Apocrypha”;三谷恵子(東京大)“Apocrypha in Apocrypha: The Story about Twelve Fridays”
- 3月16日 木村護郎(上智大)「境界研究にとって『言語』とは何か:ドイツ・ポーランド国境地域を事例として」;小森宏美(早稲田大)「記憶の中のペレストロイカ期:ラウリスティン、サヴィサル、リュートル」(客員研究員セミナー)
- 3月17日 澤田和彦(埼玉大)「プロニスワフ・ピウスツキ関係新発見資料について」(客員研究員セミナー)
- 3月22日 藤森信吉(センター)「ウクライナ東部占領地域はどうなっているのか:ドネツク人民共和国滞在記」(北海道スラブ研究会)
- 3月23日 Kristian Feigelson(パリ第3・新ソルボンヌ大、フランス)“Filming the Terror in USSR”(SRC特別セミナー)
- 3月25日 第16回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会(最終講義) 望月哲男(センター)「ラスコーリニコフの最初の一步:ドストエフスキー『罪と罰』第1部を拾い読む」
- 3月28日 日臺健雄(埼玉学園大)「1930年代ソヴェトにおける農民の生活とコルホーズ市場:スヴェルドロフスク州の事例を中心に」(客員研究員セミナー)
ロバート・グリーンバーグ教授の人文・社会科学に関する連続講義 Robert Greenburg(オークランド大、ニュージーランド)“Asserting the Position of the Humanities and Social Sciences: Perspectives from the USA and New Zealand”
- 3月29日 Robert Greenburg(オークランド大、ニュージーランド)“Making Linguistic Analysis Impactful: Interdisciplinary Approaches to Research on the Slavic Language”
- 3月30日 立花優(北大・文)「ジョージア(グルジア)調査報告:マイノリティの統合と政治参加」(北海道中央ユーラシア研究会/昼食懇談会)
- 4月21日 大崎果歩(東京大・院)「レフ・トルストイの聖書翻訳:『荒野の誘惑』の解釈をめぐる」(ユーラシア表象研究会)
- 5月14日 パネルディスカッション「ユーラシア地域大国を考える」 井上貴子(大東文化大)「文化の比較はいかにして可能か:地域大国比較研究の射程」;宇山智彦(センター)「国際関係における威信と感情:帝国論を応用した関係性比較の方法の構築に向けて」

人事の動き

◆ 望月哲男教授の退職と最終講義 ◆

この3月をもってセンターの望月哲男教授が定年退職しました。望月教授は1986年4月に就任されて以来、30年にわたりセンターに勤務されました。その間に1994年4月から96年3月までと2010年8月から12年4月までの二度、センター長を務めています。

望月教授のご専門は第一にはドストエフスキー研究ですが、ペレストロイカ期からソ連崩壊にかけて活況を呈した現代ロシア文学の紹介・研究にも積極的に取り組み、多くの研究論集を刊行された他、2000年夏、2006年冬には現代ロシア文化をテーマにした国際シンポジウムを組織されました。トルストイやドストエフスキーなどの古典からソローキンのような現代文学にいたるま



送別会にて

で翻訳の仕事にも大きな成果をあげられ、『アンナ・カレーニナ』の翻訳ではロシア文学国際翻訳者センターの2010年度最優秀翻訳賞を受賞されています。研究者の間での望月教授の人柄や研究活動への信頼は高く、2013年からは日本ロシア文学会の会長を務められています。

3月25日にはセンターの公開講演会シリーズを利用して望月教授の最終講義「ラスコーリニコフの最初の一步：ドストエフスキー『罪と罰』第1部を拾い読む」が開催されました。その後、センター4階のオープンスペースで送別会がおこなわれました。最終講義と送別会には道外からも多くの研究者が参加して、望月教授の人望の高さをいま一度印象付ける催しとなりました。[越野]

◆ 助教の就任 ◆

本年4月1日をもって、**油本真理**さんがセンター助教に就任されました。油本さんは東京大学大学院法学政治学研究科で現代ロシア政治を専攻され、博士課程修了後は日本学術振興会特別研究員及び立教大学法学部助教を務められました。センターでは従来から続けている、ロシアにおける中央地方関係及び地方間関係の政治に関わる研究に加えて、権威主義体制下の選挙についての比較分析をおこなうことも計画されています。[仙石]

本年4月1日をもって、**菊田悠**さんがセンター助教に就任されました。菊田さんは東京大学大学院総合文化研究科で文化人類学を専攻して博士号を取得し、2015年4月からセンターの非常勤研究員を務めていました。長期間のフィールドワークに基づく著書『ウズベキスタンの聖者崇敬：陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』など、中央アジアを対象とする人類学研究の分野で多くの業績があります。近年はウズベキスタンからロシアへの労働移民にも関心を広げ、その成果論文の一つが、今年の *Central Asian Survey* 第1号に掲載されたところです。[宇山]

本年4月1日をもって、**加藤美保子**さんがセンター特任助教に就任されました。加藤さんは北海道大学文学研究科でロシア外交を専攻され学位を取得し、『アジア・太平洋のロシア：冷戦後国際秩序の模索と多国間主義』（北海道大学出版会）などを刊行し、学界などでも活躍されてきました。センターでは新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較」の国際関係班で学術研究員を務めるなど、研究コミュニティで一定の存在感を示してきました。人間文化研究機構の新しいプロジェクト「北東アジア地域研究」でも国際関係班の担当として、他の拠点との連携や研究活動を推進する任を担います。[岩下]

◆ 非常勤研究員・博士研究員・学術研究員紹介 ◆

宗野ふもと 2016年4月に着任（非常勤研究員）

研究テーマ：ウズベキスタンのバザールと交渉が生み出す社会関係

神竹喜重子 2016年5月に着任（非常勤研究員）

研究テーマ：20世紀初頭のロシア音楽批評

後藤 正憲 2016年4月に着任（博士研究員）

研究テーマ：北極域研究推進プロジェクト・北極の人間と社会：持続的発展の可能性

ククリナ、アレクサンドラ 2016年4月に着任（学術研究員）

研究テーマ：冷戦後の日露関係中露関係における1990年代以降の資源外交

金山浩司さん（前非常勤研究員）は退職されました。天野尚樹さん（前学術研究員）は退職されました。高橋美野梨さん（同）は、4月より博士研究員として北極域研究センターに移られました。[事務係]

◆ 2016年度の客員教授・准教授 ◆

公募していました客員教授・准教授は審査の結果、次の7名の方々をお願いすることになりました。
[事務係]

氏名	所属	研究テーマ
小椋 彩	ロシア・ポーランド文学研究者	ポーランドの亡命ロシア文学に関する研究
北見 諭	神戸市外国語大学外国学部	ロシア宗教哲学ルネサンスの生の思想と世界戦争
ティムール・ダダバエフ	筑波大学人文社会系	対中央アジア外交政策の日・中比較
田村 容子	福井大学教育地域科学部	1950年代の中国とソ連の芸術交流：中国プロパガンダ芸術に見る社会主義の受容と移植
日臺 健雄	埼玉学園大学経済経営学部	スターリン体制下コルホーズ市場における取引価格の変動要因
藤代 節	神戸市看護大学看護学部	シベリアの少数民族の言語生態について：20世紀初頭のトゥルハンスク北部域のドルガン語の形成とその後
麓 慎一	新潟大学人文社会・教育科学系	19世紀後半から20世紀における帝政ロシアの領域変容と日本社会

◆ 事務職員の異動 ◆

新任紹介：田形みどり事務補佐員（事務室）

中野文事務補佐員、原田千里事務補助員は退職されました。山本翔平係員は、工学系事務部総務課に転出されました。[事務係]

パミールの「ガルムチャシマ」と札幌の定山溪

トヒル・カランドロフ（ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所／センター 2015年度特任教授）

多くの人は、阿部寛が主演する日本の空想的コメディ「テルマエ・ロマエ」を見たことがあるだろう。彼が演じる主人公である古代ローマの建築技師ルシウスは、西暦128年の世界から不思議なことに現代の日本の温泉に現れる。私は、井上教授の勧めで札幌近郊の定山溪温泉を初めて訪れた時、似たような感覚を味わった。その後私は何度かこの温泉を訪れた。ルシウスと同様に私も、自然の恵みを人間の需要と楽しみに応じて、自然との絶妙なバランスの中で調和的に利用する日本人の能力に驚かされた。定山溪の温泉（私は何度か定山溪ビューホテルに行っていた）は、建物の中にも自然の中（露天風呂）にも浴室があった。自然を近くに感じたいければ、外に出るとよい。現代技術を快適に味わいたければ、屋内の浴室に行けばよい。露天風呂がとりわけ素晴らしいのは冬で、きらめく白い雪の帽子を



筆者

かぶる周りの景色を、お湯の中で穏やかに座って楽しむことができる。まさに母なる自然の偉大さと人生の意義、宇宙とそこにおける自分の位置について考えるのによい時間である。映画ではルシウスは皇帝の命令により浴場を建設する際に、ローマ軍団の休息と回復を考えなければならなかった。今日の温泉も同様に休息と治療が念頭に置かれているが、もはや兵士のためではなく、様々な職業の一般人のためのものである。温泉を訪れその効能を感じれば、札幌の市民と来訪者の力の回復に温泉がどれだけ重要かわかるだろう。



ガルムチャシマ

私が生まれて初めて温泉に入った場所は、私が生まれ育ったパミール(タジキスタン共和国)で、その時私は14歳だった。温泉はタジキスタンの山岳バダフシャン自治州の中心都市であるホログの街から数キロ離れたところにあり、タジク語で「温泉」を意味する「ガルムチャシマ」という名前が付けられている。それがいかに普通ではなく、おもしろいものだったかを、今でも覚えている。入浴所は一つしかなく、女性

と男性のどちらが最初に入浴所のある高地に登って一時間占拠するかという、ある種の競争が常にあった(ムスリム社会では男性と女性と一緒に入浴することができないのだ)。子供の頃の疑問は、なぜたとえば女性用の入浴所を別に離れたところに作らないのかということだったが、父や他の大人たちはそれに答えてはくれなかった。定山溪に、山に面した感動的な景色を望む16階の温泉も含め、男性用と女性用の浴場がそれぞれいくつもあるのを見て、私はパミールのガルムチャシマの温泉に浸かった少年時代を思い出した。今日ガルムチャシマではもちろん男性用の浴場と女性用の浴場があるが、二階まではお湯は届けられていない。きっと日本の技師の助けが必要だろう。

ガルムチャシマと定山溪には多くの共通点があるように私には思える。第一の類似点はもちろん風景である。山々が二つを結び付けている。第二は、これらの温泉が多く外国人を惹きつけていることである。ガルムチャシマでは外国語の会話がとりわけ夏には絶え間なく聞こえる。定山溪も世界のさまざまな国から観光客が訪れている。いつかの土曜日に私は露天風呂でマレーシアからの旅行者と知り合った。彼はムスリムで、私も同じ宗教に属するというのを知って、非常に喜んだ。私は彼の祖国での宗教生活について尋ねた。彼の言葉によるとムスリムにはイスラーム法——シャリーアがあり、それ以外の国民には民法があるということだった。シーア派は彼の国では非合法である。また、イスラームからの他宗教への改宗は死刑となる。私の話し相手はこの厳格な法律を支持していた。そうでなければ綱紀が乱されると彼は言った。タジキスタンでは信仰を変えることで殺されることはないと言うと彼は非常に驚いていた。

もう一つの類似点はどちらも人間を孤独にし、自分とも自然とも、一対一で向き合うことを可能にする場所であるということだ。概して、普通のアクアパークや公衆浴場と違い、温泉の中の人間はほとんど騒ぐことはない。彼らはそれぞれの世界に浸り、静寂に耳を傾けるのだ。日本人にとって人間と自然の調和が宗教の一部であるとすれば、パミール人たちが現在まで尊ぶものは

偉大なゾロアスター教の三要素、善い考え、善い言葉、善い行いである。温泉で過ごす時間は、人生の精神的土台を自分の中で強めることのできる時間である。

さて、パミールでは温泉の湯の基本的な効能は、肌への作用と飲泉による人体の調節であると考えられている。治癒を求めて訪れる患者は湯船に浸かる前に少し温泉の湯を飲むことがしばしばである。パミールの温泉を長年研究してきたシリンベク医師の言葉によると、湯は深い精神的エネルギーであるバラカ——つまり恵みの物理的な現れであり、物理的に計測可能なエネルギーに満たされているということだ。人間の体は同様にエネルギーに満たされているため、湯のエネルギーに触れると乱された均衡が改められ、バランスのとれた状態になり始める。深い地下の源泉から泡の形で湧き出す湯は、治癒力を与える様々な要素のエネルギーに満たされた無数の層を通る。大地のエネルギーを運びながら、湯は人間内部の病気の弱いエネルギーよりも強力で生産的な力となる。この湯と患者の関係から、身体を均衡させ調整する力としての湯の可能性を見て取ることができる。



定山溪

定山溪からバスで帰りながら、私はいつも自然がその恵みを人類にいかに均等に分け与えているかを考えていた。ある者たちには石油を、ある者たちには水を、ある者たちには沙漠を、ある者たちには山をといったように。そしてその贈り物をどのような感謝をもって受け取りどう利用するかは、全て人間次第である。悪い天气が自然の中に存在しないのは、悪い地理上の場所が無いことと同様だ。私たちがどのように用心深くそれらを扱い、未来の世代に渡すかは、それとは別の問題である。人間の生まれた場所に対する特別な優しい愛情というものは、恐らく、誕生の瞬間に生まれる感情的な愛着なのだろう。どうやらそれゆえに、私はこの日本の山地をこれほど好きになったのだ。そこは私に故郷パミールとガルムチャシマを思い起こさせる。バスの中で今回も私は、忘れ難いロシアの詩人、ヴラジーミル・ヴィソツキイの歌を思わず脳裏に浮かべていた。「山よりも良くあれるのはただ山だけ」……。

(英語から佐々木祐也訳、宇山監修)

スラブ・ユーラシア研究センター 60 周年:ロシア・ユーラシア研究の大きな挑戦

ステファン・キルムゼ (フンボルト大学/センター 2015 年度特任准教授)

2015 年 12 月 10～11 日に、外国人研究員はスラブ・ユーラシア研究センター 60 周年記念に参加する機会に恵まれた。日本各地、東アジア、アメリカ、ロシア、西ヨーロッパからスラブ・ユーラシア地域研究者、実務家、大学院生が 2 日間のシンポジウムに集まって、1950 年代半ばからのセンターの歩みを振り返り、一個の研究領域としてのスラブ・ユーラシア研究の現在と未来について考えた。

当時の関係者や歴史家がセンターの始まりについて思い出と物語を披露する中で、冷戦の最中に、しかもその一方の主役であるソヴィエト連邦の研究を専門とする地域研究の拠点を

設立することの特異性と挑戦について、興味深い事実が浮かび上がってきた。センターはこの種の研究所としては日本で最初のものであり、今日まで最大のものであり続けているが、それが東京でなく札幌になったことも含め、センターの設立が当初いかにアメリカ側の意向や利益を映したものだっただのかということも、このような興味深い事実の一つだ。ロックフェラー財団は、設置可能な場所を調べたり、相応しい学者を探すのを手助けしたりと、設立に際しておそらく最も重要なアクターだった。また、センターの名称としてロシアあるいはソヴィエト研究センターではなく「スラブ研究センター」（ごく最近スラブ・ユーラシア研究センターに改称）が好まれたという事実も興味深い。前者では共産主義のシンパに映りすぎるのに対して（事実そう恐れられたのだが）、「スラブ」であれば、当時の関係者いわく「それが何を意味しているのか実のところ誰もわからなかった」という強みがあった。センターの設立と初期の歩みが、高度に政治化した時代における学問と政治の密接な絡み合いを示しているのは明らかだ。

同時にシンポジウムは、歴史家、政治学者、国際関係論の専門家、実務家、文学研究者たちのすばらしい貢献により、地域研究が学術研究の一つのかたちとして魅力を保ち続けていることを象徴的に示すものでもあった。イギリスとドイツの大学に15年間身を置き、人類学から歴史学に転じて研究をしている私にとって、2日間のシンポジウムでなおさら明らかになったのはこのことだった。ポスト共産主義の世界にあっては、ロシアとユーラシアの学際的研究は幾分時代錯誤になってしまっている（もっとも、ドイツをはじめいくつかの国では隆盛など一度もなかったが）。こんにちでは狭いディシプリンに基づくアプローチが優勢な傾向にあり、スラヴ・ユーラシア世界に関係するあらゆる資金は、かつてなく低いレベルに達してしまっただけだ。しかし、シンポジウムでの活発な議論を見ていると、地域研究、とりわけロシア・ユーラシア研究でも、まだ強固な事例があるのだと気付かされた。では今、どのような課題に直面しているのだろうか。

この専門分野の問題の1つは、全体的な関心とそれに伴う資金が別の地域に移ってしまったことだ。中国、南アジア、中東といった頗るダイナミックな地域が舞台の中心に躍り出ている。しかしいま、ウクライナ危機と中東でのロシアの新しい（よかれあしかれ）積極的な役割によって、旧ソ連圏に関する専門知識がいわれるほど前世紀的なものではないということが理解されつつある。ドイツでも、思想上の変化の最初のきざしはすでに見えている。いくつかの大学のロシア史学科は数年前に閉鎖が決まっていたものの、2014年のはじめから活力を取り戻し、若手研究者を補充した。政治が重要なのは明白だ。

二つ目の課題は、この専門分野の地理的範囲と研究対象がかつてなく不明瞭になっているということだ。ここにもまた政治が深く絡んでいる。札幌では、センターの新しい名称もある程度反映しているように、ロシアとムスリム・ユーラシアを明確に焦点としている。コンセプトとして「ユーラシア」を研究対象に据えることはほかの場所でも行われた。それはとりわけイギリスに当てはまり、私が数年を過ごしたオクスフォード大学とロンドン大学でも、関連の議論を目の当たりにした。オクスフォード大学聖アントニー校では、「ユーラシア」への転回で新しい研究課題を持つようになったということではあまりない。ロシア・東ヨーロッパ研究プログラムがロシア・ユーラシア研究プログラムに変わったのは、ヨーロッパの一部として扱ってもらいたいという中東欧の人々の意思を反映したものだ。もはやロシアと一緒にされなくなかったのだ。これに対してロシア研究者にとっては、ユーラシアといういささか捉えどころのない分類はむしろ歓迎すべき新たなパートナーのように映った。しかし、ロンドン大学の場合が示すように、事態はより複雑だった。そこでは、東欧研究よりも中央アジア・カフカス研究がスラヴ語圏研究の守備範囲から離れてしまったのだ。1991年以降、旧ソヴィエト南部が文化的にテュルク・ペルシア語圏に含まれることが強調されるにつれ、

この領域をソヴィエトそしてポスト・ソヴィエト世界の一部として研究するという考えがますます時代錯誤にみられるようになったからだ。確かに一方において、オクスフォードと同様、ロシアと距離を置くことが、地域研究の再編には枢要だった。しかし、オクスフォードと異なり、その結果は、ユーラシアの活性化にはつながらなかった。かつてのソ連圏は北半分と南半分に切り分けられ、教育と研究での連携もないそれぞれ別個の機関で扱われたので、ユーラシアという理解がほとんど無意味になってしまったのだ。もちろんロンドンとオクスフォードは例に過ぎない。この二つの事例が示しているのは、旧ソ連研究という枠組みで何をどのように研究するのかということについていまだ合意がないということである。

三つ目の課題は、批判を受けやすい地域研究の性格だ。オクスフォードとロンドンの事例は、私がドイツで経験したのものよりもずっとはるかに励みになるものだ。地域研究のセンターは、第二次世界大戦後のアングロ・アメリカ世界で激増した。ドイツの大学においては、地域研究が同様の重要性を獲得することは全くなかった。私がシンポジウムで何度も聞かれたのは、ドイツにおけるロシア・ユーラシア研究における大きな課題は何かということだった。答えは単純だ。そもそも、まったく遺憾ながら、地域研究という枠組み自体が存在していないのだから、大きな課題もなにもないということだ。ドイツ人はディシプリンに沿って思考する。多くのソヴィエト史研究者はせいぜい、ドイツや世界の他の地域を対象とする歴史家と共有するプロジェクトに取り組む程度だ。歴史家の中には、地域に特化した歴史など無意味だと言う者さえいる。同様の論理は、ポスト・ソヴィエト空間で人類学に取り組む研究者にも働いている。彼らもまた自分たちのディシプリンから離れることはない。なるほど、ドイツでは学際的研究に大きなお金が付いている。しかし惜しむらくは、この資金が地域を対象に使われることは決してない。それは、戦争、表象、制限された国家の役割といった壮大ではあるが模糊としたテーマに分配されている。これらのプロジェクトがどのような学際的知識を生み出すのかは、多くの人々には定かではない。確かなことは、それが政策に有益な地域に関する知識ではないということだ。

これら多岐にわたる課題が地域研究一般、そしてとくにロシア・ユーラシア研究にある中で、札幌のシンポジウムでの議論は目の醒めるものでかつ時宜にかなったものだった。得られた答えは少なかったが、多くの重要な問いが提起された。過去 25 年間、この分野は自己完結的で防御的だった。今こそ再び大きな問いに目を向け、広く国際的な研究課題の実現に向けて努力すべき時だ。例えば、ポスト社会主義社会における権威主義的統治の変容と持続について、ロシア・ユーラシア世界は我々に何を教えてくれるだろうか。ロシア・ユーラシア世界の歴史は、国民のあり方や多文化主義に対するこんにちの様々な態度について、何が言えるだろうか。よくはいわれるものの決して十分には分析されることのない「社会主義の遺産」とは何なのか。こうした問いは、継続的な学際的協力を必要としている。地域研究は、40、60 年前と同じく今でも必要であり価値のあるものなのである。

(英語から武藤鉄太訳、長縄監修)

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

2016 年 6 月 25-26 日 日本比較政治学会 2016 年度研究大会 於京都産業大学壬生校地

<http://www.jacpnet.org/event/taikai/2016j.htm>

7 月 7-8 日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム "Russia's Far North: The Contested Frontier"

- 9月8-10日 第14回欧州比較経済体制学会 於レーゲンスブルク（ドイツ）
<http://www.eacesconference.eu/>
- 9月24-25日 第7回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会 於華東師範大学（上海） <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/applications/Call%20for%20Papers%20EAC%202016.pdf>
- 10月1-2日 日本政治学会研究大会 於立命館大学
<http://www.jpasa-web.org/2015/10/2016-1.html>
- 10月8-9日 ロシア史研究会 2016年度大会 於東北大学川内南キャンパス
http://www.gakkai.ac/russian_history/ 大会 /
- 10月14-16日 日本国際政治学会 2016年度研究大会（60周年記念大会） 於幕張メッセ
<http://jair.or.jp/>
- 10月22-23日 第66回日本ロシア文学会定例総会・研究発表会 於北海道大学
<http://yaar.jpn.org>
- 10月29-30日 ロシア・東欧学会 2016年度研究大会 於京都女子大学
<http://www.gakkai.ac/roto/>
- 11月3-6日 CESS（中央ユーラシア研究学会）第17回年次大会 於プリンストン大学
<http://www.centraleurasia.org/annual-conf>
- 11月5日 内陸アジア史学会 2016年度大会 於駒澤大学
<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/>
- 11月17-20日 ASEES（スラブ東欧ユーラシア学会）第48回年次大会 於ワシントンDC
<http://www.aseees.org/convention> [編集部]

大学院だより

2015年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、6名が修士課程を修了しました。また、松下隆志さんが「ナショナルな欲望の回帰：1900～2000年代のロシア・ポストモダンニズム文学の変容」という論文で課程博士号を取得しました。また、松下さんには北海道大学文学部同窓会から楡文賞も授与されました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。

4月には、修士課程3名の入学がありましたが、博士課程に新入生はいません。今年度の大学院生は以下の皆さんです。[長縄]

2016年度スラブ社会文化論専修大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員	博論指導委員
D3	大武由紀子	アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス	宇山	越野	野町
D3	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフと20世紀初頭のロシア文学	越野	野町	宇山
D3	長友謙治	ロシアの穀物輸出国としての発展可能性	山村	田畑	家田
D3	アセリ・ピタバロヴァ	中央アジア諸国・中国間関係における相互認識	岩下	宇山	
D3	ヤン・ファベネック	オホーツク海域及びその沿岸地域をめぐる現代の地政学	岩下	田畑	
D3	小野瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄	
D3	服部倫卓	ロシア・ウクライナ・ベラルーシの対EU経済関係	田畑	山村	
D2	生熊源一	戦後ロシア美術	越野	野町	
D2	アリバイ・マムマドフ	北方領土問題とナゴルノ・カラバフ紛争の比較	岩下	田畑	
M2	河津雅人	ウクライナの民主化	仙石	宇山	
M2	川淵華子	帝政ロシア末期における小ロシア地域のナショナルリズム	長縄	宇山	
M2	金盾	ロシア東部地域における日系小売業の発展の可能性	田畑	山村	
M2	ミルラン・ベクトゥルスノフ	ソヴィエト政権初期のキルギスにおける民族エリート	宇山	長縄	

M2	北村宣彦	亡命思想家イワン・イリインの国家観の変遷：フ ァシズムの視点から	越野	ウルフ
M2	イーゴリ・ コワリョーフ	日露間のスポーツ交流の実状と展望	田畑	岩下
M2	武藤鉄太	帝政ロシアのナショナリズム：古儀式派の視点から	長縄	宇山
M2	佐々木祐也	18世紀後半のロシア語への翻訳文献にみる西欧観	越野	野町
M1	上村正之	ナポレオン戦争期のカザーク・イメージ	越野	宇山
M1	千須和里美	カリーニングラード周辺地域におけるロシア・EU の地域協力	仙石	岩下
M1	武田和浩	ロシアのビジネス立地と日本企業の進出形態の検討	田畑	山村

大学院修了者の声

スラブ・ユーラシア研究センターで学んでほしい

植松正明（2015年度修士課程修了）

スラブ・ユーラシア研究センターで過ごした3年の院生生活は私の人生にとってとても内容の濃いものであった。私が学位記をもらった日、札幌で過ごす最後の夜だったが、自分自身の院生生活を達成感とともに思い返していた。私は恵まれた環境で3年も勉強することができたのだと。もし、大学院の進学先を迷っていてこのニュースレターを読んでおられる人がいたら、進学先としてスラブ・ユーラシア研究センターを薦めたい。私がこの研究センターを勧める理由は2つある。



エストニア調査の際に訪れたタリンの街並み

第一に、大学院生への助成制度が充実していることである。国内外の研究会および学会での報告の助成だけではない。大学院生が国内外で調査をする場合にも助成制度を利用することができる。私も修士課程1年次にこの制度を利用してエストニアで2週間ほど資料を収集することができた。私の専攻は歴史であったため、実際に多くの史料を現地で手に入れることが重要であった。特にエストニアに関する史料は二次文献を含めて日本では多いとは言えなかったため、なおさら現地に行く必要があった。また現地に行ってみることで、エストニア人の先生方、学生と知り合い、多くの貴重な助言を頂くこともできた。本から手に入れる知識も大切だが、自分が研究対象としている地域に足を運んでみることで今までに見えてこなかった視点から研究テーマを見ることができるようになった。当初私は自身の研究テーマを狭い切り口からしか考えられず、そのことに悩んでいたが、エストニアに行ったことで違う方向からも自身の研究を見つめるようになった。この研究センターの助成がなければ、私は修士論文を書き終えることができなかつたかもしれない。

第二に、この研究センターは様々な分野の人の話を聞くことができる場だということだ。この研究センターには様々な分野、地域を研究している人たちが属している。研究センターの人だけではなく、年2回のシンポジウムや研究会のために国内外から研究者の方々がスラ

ブ・ユーラシア研究センターに来られる。研究を進める上で自分の研究と近い本ばかり読んでいると、どうしても視野が狭くなってしまうこともあるだろう。そうした時に研究会に出席して自分の研究にとってヒントを得ることがあった。シンポジウムや研究会では外国語で報告されることも少なくないので、外国語で学術的な話を聞くだけでも勉強になった。私はもっと積極的に研究会、シンポジウムに参加しておくべきだったと今では後悔しているくらいだ。同じ場所で様々な地域、分野を研究されている方々の報告を聞ける場所は日本でも多くはないだろう。

最後に改めて院生生活を振り返ってみると、本当に内容の濃い3年間であった。修士論文だけではなく、エストニア滞在や他大学での発表など今までの私の人生で経験することができなかったことに挑戦した。これらのことを成し遂げられたのは、言うまでもなくこの研究センターでの先生方、大学院生との出会いがあったからである。指導教授である長縄宣博先生には何度も私の書いた文章を直していただいた。先生からの叱咤激励とご指導があったからこそ修士論文を書き終えることができた。長縄先生をはじめとするスラブ・ユーラシア研究センターの先生方にはこの場を借りて改めて感謝申し上げたい。勉強は1人でするものなのかもしれないが、それには人との出会いが大切なのだと気付かされた。違う分野を専攻している大学院生とも同じ部屋で勉強したのも貴重な経験であった。これらの経験を活かし、次のステップでも自身の課題に取り組んでいきたい。この文章を読むことが誰かの大学院進学の一助になれば幸いである。(2016年4月11日)

学生生活の最後の日に

真弓浩明 (2015年度修士課程修了)



ウラジオストクに留学した時の筆者(前列左端)

していたが、努力が及ばず、良い結果が得られなかった。私は外交官になるために自分の能力を高め、また自分の進路を考え直す期間を設けるためにスラ研に進学することを決めた。

当初そうした覚悟の甘さをはらんでいたが、スラ研で学んだ経験は私の生き方を変えてくれた。まず、一つの研究課題に全身全霊をかけて取り組む先輩方、同輩たちから良い刺激を受けた。私は飽き性でいろいろなことに手を出しがちだったが、様々な言語の文献を根気よくあさって論文や報告にまとめていく先輩方、同輩たちの姿を見て、物事に一所懸命に取り組む忍耐を学んだ。私が修士課程1年生だった年の秋、当時の2年生の先輩方は1月上旬の

私は他の人に比べれば優柔不断な覚悟でスラ研の門を叩いてしまった。第一に、研究を円滑に進めるために必須である語学力が十分ではなかった。出身学部が法学部だったため、英語の勉強はさぼりがちで、ロシア語についてもスラ研に入る数か月前から手を付けたという程度だった。第二に、ロシアの政治・経済を深く研究したいという気持ちを持っていたものの、スラ研で学ぶことは私にとって消極的な選択だった。私は学部生のとき外交官になることを目指

修士論文の締め切りに向けて執筆作業を本格化させ、時を同じくして博士課程に在籍していた先輩方も研究の成果を博士論文にまとめかかっていた。私はそのころ2限目の授業が始まるくらいの時間帯に院生室に来て5限目が始まる前くらいに家に帰るという生活サイクルで過ごしていたが、先輩方はいつも私よりも早い時間から院生室で作業を始め、私よりも夜遅い時間まで残って研究に励まれていた。傍目でその姿を見ながら「すごいなあ、とても真似できないなあ」とのんきに考えていたが、私自身も修士論文を書く段階に至ると自然と同じことをするようになっていた。

つぎに、精神的な面だけでなく、研究の実践的なやり方も教わった。先行研究を渉猟して研究テーマを定め、必要な参考文献を集めてそれらを読み込み、論文にまとめるという研究者にとっての基礎中の基礎を先生方、先輩方から繰り返し指摘されて、徐々に身に付けていった。スラ研が院生のために部屋を設けており、研究員の方々が身近にいるという環境を備えていることは研究が行き詰まったときにとても助けになった。院生室のパソコンの前で作業をしていると、先輩方が「いま何しているの？」と声をかけてくださり、その度に自分の研究の進捗状況を説明することは思考を整理することに役立った。また、総合演習での報告を終えた後、報告を聞いていた研究員の方がアドバイスをくださったたり、未着手の参考文献を教えてくれたりもした。意見をくださる方々は自分とは異なる専門分野を研究している場合がほとんどであったが、指摘する要点がいつもの的を射ていた。スラ研には様々な専門分野の研究者が地域研究の枠組みの下に集いながらも、互いの研究を気にかける風土があり、それから生まれる新鮮な刺激を学生の身にありながら享受することができた。

私は無事に修士論文を書き上げて学位をいただき、希望する進路に進むことができたが、そうすることができたのは先生方や先輩方、同輩、後輩をはじめスラ研で出会った多くの方々のおかげであり、何よりも私の長い学生生活を精神的・経済的に支えてくれた両親がいてくれたからだと思う。それらの人々への感謝の念を忘れずに、これからはいただいた御恩を返す気持ちで精進していきたい。(2016年3月31日)

図書室だより

◆ 最近の受入資料から ◆

ここしばらく、図書費は大幅な節減を余儀なくされる一方、ロシアではインフレ、かつさまざまな出版企画が続々登場するため、センターとして当然揃えるべきというものの発注を見合わせるが増えているのは残念なことです。

しかし、年度末になってセンターの関わるプロジェクトからの話もあり、4タイトルのマイクロフィルムを購入しましたので、お知らせします。

いずれもソ連期の雑誌または継続刊行物で、

①『われらの建設 Наше строительство』1929年にソ連邦労働国防評議会建設委員会とロシア連邦社会主義共和国建設委員会のビュレティンとして創刊。月2回発行を目指したようですが、しばしば合併号になっています。1930年3/4合併号からはソ連邦 Gosplan 建設部とロシア連邦建設委員会ビュレティン、1932年からはソ連邦・ロシア連邦 Gosplan の機関誌というサブタイトルがついています。内容としては建設経済・建設政策関係の論文と、建設関係の法令・政府決定類を掲載します。今回、1929～1937年までの分、13リールを購入しました。ただし、1929年15-17号、1932年2号および1937年10号が欠けています。なお、国内では他に一橋大学経済研究所資料室がこれを所蔵します。

②『農業経済の道 Пути сельского хозяйства』は、農業人民委員部とチミリャーゼフ記念農業アカデミーの機関誌として1925年7月創刊されました。1930年1月号(通号55号)に『農業の社会主義的再建 Социалистическая реконструкция сельского хозяйства』と改題します。刊行頻度は月刊。理論誌という位置づけで、ソ連農業の現状や政策を扱った論文を掲載しています。今回、センターは1925年の創刊から1936年6月までの分、12リールを購入しました。

この雑誌は、その後、1940年に『社会主義農業 Социалистическое сельское хозяйство』、1957年に『農業経済 Экономика сельского хозяйства』、1988年に『農工コンプレクス: 経済、経営 АПК: экономика управление』と改題して現在に至ります。

国内の所蔵状況としては、1920年代の分は、マイクロが東京大学経済学部と一橋大学経済研究所にあります。1930年代の分は、北大附属図書館に原誌がありますが、欠号を多く含みます。そのほかでは、東京大学経済学部と一橋大学がマイクロフィルムを所蔵しています。

③『北極研究所紀要 Труды Арктического института』レニングラードで、1932年に創刊(刊行時期がずれたようで第1巻は1933年刊、第2巻は1932年刊と表示されています)。不定期刊で、地質学、植物学など、現地調査の成果報告を多く掲載しています。その後1958年に研究所が北極南極研究所に改称されると、紀要は『北極・南極研究所紀要 Труды Арктического и Антарктического научно-исследовательского института』に改題され、1966年の第280巻まで続いたようです。

今回、センターは、第1巻(1933年)～第78巻(1937年)を収録するフィルム12リールを購入しました。ただし、残念ながら第27巻、第57巻、第61巻および第76巻は欠号となっています。他の所蔵機関としては、東北大学などいくつかの機関が原誌を所蔵しますが、欠号が相当あります。

④『北極の諸問題 Проблемы Арктики』③を出版したのと同じ研究所が1937年に創刊した北極地方の総合的研究雑誌です。1959年まで継続し、その後『北極と南極の諸問題 Проблемы Арктики и Антарктики』に改題しました。

今回、センターは、1937年から1959年までを収録するマイクロフィルム9リールを購入しました。ただし、欠号が多数あります。国内で、この資料を所蔵する機関は、他に確認できませんでした。

なお、まぎらわしいことに、1957年に同じ名前の継続出版物が同じレニングラードで発刊されています。こちらの方は、北大低温研究所が一部の号を所蔵しています。

このほか、千島・樺太関係、および旭川を本拠とした第七師団関係の資料を若干入手しました。

①『北樺太東海岸石油試掘調査地域報告』(北樺太石油、1928年)

②『対ソ帝国権益の危機』(北樺太鉱業、1939年)という、いずれも1925年の日ソ基本条約締結後の北サハリンで操業していた会社の作成した小冊子。

③『千島列島資源調査復命書(自昭和14年度至昭和16年度)』北海道水産試験局の三原氏が、部内で作成した報告書に、一部、自分の野帖もふくめて一緒に綴じ合わせた資料。ウルップ島や占守島など、中千島、北千島の状況を記したものととして貴重と思われます。

④『新興樺太人事録』(篠田秀作、1937年)日本領だった樺太の主要人物を経歴・写真入で紹介する資料ですが、所蔵する図書館は少ないようです。

⑤『第七師団歴史』第七師団が書きついで本部に保管していた手書き文書のコピーです。この師団は、1896年に編成され、旭川を本拠にしますが、その後、日露戦争、シベリア出兵、北樺太占領、ノモンハン事件などに参加しました。この師団をとりあげて保坂正康氏は、『最強師団の宿命』(毎日新聞社、2008年)を書いています。

1868年の開拓使発足から説き起こして1945年6月末までの部隊の動静を記すほか、別冊として『北海道竝権太兵衛沿革』、『権太守備隊司令部歴史』、『満洲駐劄留守師団歴史』が付属します。[兔内]

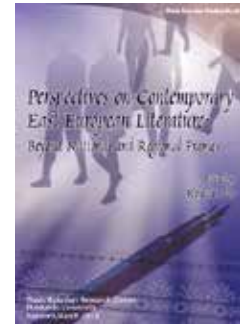
編集室だより

◆ Slavic Eurasian Studies 30 ◆

Perspectives on Contemporary East European Literature: Beyond National and Regional Frames の刊行

本号は阿部賢一氏を代表者とする科研費基盤B「東欧文学における『東』のイメージに関する研究」の主催により2014年9月28日に立教大学で開催された国際シンポジウムの発表原稿を中心にして編集したもので、本センターからは越野剛、野町素己両名が寄稿しています。その他にも著名作家Olga TokarczukとMichal Ajvaz両氏のエッセーや故Jerzy Treder教授のカシュブ語についての論考が収録されています。本号の内容は次を参照してください。[越野]

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no30_ses/index.html



◆ 「シリーズ・ユーラシア地域大国論」第4巻 ◆

『ユーラシア近代帝国と現代世界』（ミネルヴァ書房、2016年）の刊行

センターが中核となった新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の成果である「シリーズ・ユーラシア地域大国論」の第4巻として、宇山智彦編『ユーラシア近代帝国と現代世界』が、2016年2月にミネルヴァ書房から刊行されました。新学術領域研究第4班「帝国の崩壊・再編と世界システム」のメンバー9人が執筆しています。これにより、シリーズ全6巻が完結しました。

ユーラシアの地域大国であるロシア、中国、インドは、ロシア帝国、清朝、英領インド帝国という帝國的過去を基盤としています。本書は、これら3地域に、日本、オスマン、イラン、アメリカも加え、帝国・植民地の近代化、大国と小国の関係、帝国崩壊後の国家と世界秩序の再編を論じます。諸帝国の競争と協調、帝国権力と協力者・抵抗者・観察者の間で交錯する多彩なまなざしや駆け引きは、大国中心の歴史観でも、その単なる否定でもない、多面的な歴史の見方を教えてくれると思います。この本を編集した時期は、ロシアや中国の大国としての自己主張が激しさを増した時期と重なっており、終章では、なぜ東アジアと旧ソ連で帝國的現象が顕著に見られるのかという問いに答えることを試みました。[宇山]



宇山智彦 序章 ユーラシア近代帝国論へのいざない

第1部 帝国と近代：相克と相乗

山室信一 第1章 国民帝国の編成と空間学知の機能：日本の帝国形成をめぐって

秋葉淳 第2章 帝国とシャリーア：植民地イスラーム法制の比較と連関

第II部 帝国と周縁：まなざしの交錯

- 守川知子 第3章 帝国へのまなざし：イラン国王，岩倉使節団，シヤム国王とロシア・イギリス
粟屋利江 第4章 帝国とジェンダー：アニー・ベサントを手掛かりに
宇山智彦 第5章 周縁から帝国への「招待」・抵抗・適応：中央アジアの場合

第III部 帝国の崩壊と世界秩序の再編

- 池田嘉郎 第6章 第1次世界大戦と帝国の遺産：自治とナショナリズム
秋田茂 第7章 経済開発・工業化戦略と脱植民地化：1940年代末～60年代中葉のインドと香港
菅英輝 第8章 「非公式帝国」アメリカとアジアの秩序形成：1945～54年
川島真 第9章 「帝国」としての中国：20世紀における冊封・朝貢認識と「中国」の境界
宇山智彦 終章 帝国・地域大国・小国

◆ スラブ・ユーラシア叢書第12巻 ◆

『北西ユーラシアの歴史空間：前近代ロシアと周辺世界』

(北海道大学出版会、2016年)の刊行



本書の基になったのは、共同利用・共同研究拠点の企画として2009年10月末におこなわれたシンポジウム「前近代北西ユーラシア歴史空間の再構築：ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」です。本書はイスラーム史、スカンディナヴィア史、ビザンツ史、モンゴル帝国史、オスマン史、そしてロシア史という普段顔を合わせることが稀な専門家による協働の結晶です。二つの総論と終章を読みますと、周辺世界との相互作用という視座で、9世紀からつい最近までのロシアの歴史を通観できる仕組みにもなっています。このような作品を可能にした小澤実氏（立教大学）の敏腕に敬服するばかりです。

本書の作成には長い年月を要しました。2009年は、2008年8月のグルジア戦争の余韻がまだ感じられましたが、2016年は、2014年のウクライナ危機がまだ進行しています。ロシアをめぐる国際情勢は、「新冷戦」と説明され、プーチン大統領の「ユーラシア」も何か自己完結的な別世界の構築を目指しているようにも見えます。こうした今だからこそ、ロシアの歴史を周辺地域さらには世界と同じ時空間に位置付ける思考が必要だと思います。地道な史料の読解に基づく本書がそうした必要に対する応答になっていることを期待する次第です。[長縄]

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第63号は、審査の結果、以下の原稿を掲載することになりました。本数としては過去最低のレベルですが、重厚なものが集まりました。[長縄]

〈論文〉

- 上垣彰・岩崎一郎 移行経済における中央銀行の独立性：インフレーション抑制効果のメタ分析
井上岳彦 ダムボ・ウリヤノフ『ブッダの予言』とロシア仏教皇帝像
高橋知之 小さな預言者：若きプレシチエーフと人格の構築

〈研究ノート〉

- 古宮路子 IO. オレーシャ『羨望』の草稿研究：カヴァレーロフとアンドレイ・パービチェフの出会いをめぐって

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第64号の原稿締め切りは、2016年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。

また、『スラヴ研究』は63号からエディトリアル・ボード（編集協力者）を設けることにしました。これは、投稿規程・執筆要領など一般原則に関する話し合いに入っていたことを趣旨としたものです。投稿原稿の採否の判断は、これまで通り編集委員会でおこないます。ご快諾をいただきました協力者の方々に深く御礼申し上げます。

（以下、敬称略）

安達祐子、池田嘉郎、宇山智彦、貝澤哉、加藤有子、高倉浩樹、田畑伸一郎、中澤敦夫、林忠行、松里公孝、三谷恵子〔長縄〕

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

5月中旬に第37号が刊行されました。37号への投稿は力作が多く、論文の採択率は46%と比較的高めでした。38号の締め切りは2016年7月15日です。どうぞ奮ってご投稿ください。以下は第37号の目次です。〔野町〕

ARTICLES

David L. Ransel Conflicts over Land Use in the Moscow Region

Serghei Golunov, Vera Smirnova Proliferation of Conspiracy Narratives in Post-Soviet Russia: The “Dulles’ Plan” in Social and Political Discourses

Владимир Шишкин Сибирское областничество в контексте революционных событий: март-октября 1917 года

Диляра Усманова Российские мусульмане и пропаганда в годы Первой мировой войны (1914-1916 гг.)

RESEARCH NOTES

Zaynabidin Abdirashidov Known and Unknown Fitrat: Early Convictions and Activities

Jelena Glišić East-West Trade and Japanese-Yugoslav Relations during the Cold War

BOOK REVIEWS

Ирина Седакова Fathme Myuhtar-May, *Identity, Nationalism, and Cultural Heritage under Siege: Five Narratives of Pomak Heritage – from Forced Renaming to Weddings* [Balkan Studies Library volume 14] (Leiden and Boston: Brill, 2014), 278 pp.

Maria Hristova Tanja Petrović, ed., *Mirroring Europe: Ideas of Europe and Europeanization in Balkan Societies* [Balkan Studies Library volume 13] (Leiden and Boston: Brill, 2014), xi+207 pp.

Nakachi Mie Irina Mukhina, *Women and the Birth of Russian Capitalism: A History of the Shuttle Trade* (DeKalb, Illinois: Northern Illinois University Press, 2014), 173 pp.

Beatrice Penati Svetlana Gorshenina, *L’Invention de l’Asie centrale: Histoire du concept de la Tartarie à l’Eurasie* (Genève: Droz, 2014), 704 pp.

Bakhtiyor Islamov On “Great Divergence” and “Great Convergence” Vladimir Popov, *Mixed Fortunes: An Economic History of China, Russia, and the West* (London: Oxford University Press, 2014), xiii+191 pp.

Ивамото Кадзухиса Тихомиров А. «Лучший друг немецкого народа»: культ Сталина в Восточной Германии (1945–1961 гг.). М.: Политическая энциклопедия, 2014. 310 С.

会 議 (2016年2～3月)

◆ センター協議員会 ◆

2015年度第4回 2月26日（金）

議題

1. 客員教授・准教授の選考について
2. 内規の制定について
3. 内規の改正について
4. 平成28年度非常勤講師の採用について

- 5. 共同研究の受入について
- 6. 研究生の受入について

2015 年度持ち回り 3月18日(金)～3月25日(金)

議題

- 1. 教員の人事(特任助教としての出向受入)
- 2. 任期付き教員の出産に係る任期更新について

[事務係]

みせらねあ

◆ センターの役割分担 ◆

2016 年度のセンター専任教員の役割分担は、以下の通りです。[田畑]

センター長..... 田畑
副センター長..... 岩下
拠点運営委員会委員..... 田畑/岩下/宇山/仙石/ウルフ

【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議..... 田畑
教務委員会..... 田畑
図書館委員会..... 仙石
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会..... 山村
環境負荷低減推進員..... 山村
国際担当教員..... ウルフ
創成研究機構運営委員会..... 田畑
低温科学研究所拠点運営委員会..... 田畑
北極域研究センター運営委員会..... 田畑
北方生物圏フィールド科学センター運営委員..... 山村
観光学高等研究センター運営委員会..... 岩下
社会科学実験研究センター運営委員会..... 山村
ハラスメント予防推進員..... 岩下

【学外委員会等】

国立大学附置研究所・センター長会議..... 田畑
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会..... 田畑
JCREES 事務局..... 田畑/高橋
地域研究コンソーシアム理事..... 田畑
地域研究コンソーシアム運営委員..... 野町/越野
京都大学地域研究統合情報センター拠点運営委員..... 岩下
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員..... 宇山
ICCEES 情報..... 野町

【センター内部の分担】

大学院講座主任.....	宇山	カチマルスキ.....	岩下
教務委員.....	長縄	ミトロージン.....	高橋(宇山)
入試委員.....	山村	非常勤研究員.....	越野
総合特別演習担当(前期) 越野(後期) 長縄	鈴木・中村基金.....	家田	
全学教育科目責任者.....	長縄	公開講座.....	仙石/高橋/油本
全学教育科目総合講義.....	高橋*	研究会・講演会(専任研究員セミナーを含む)	
全学教育科目演習.....	長縄	野町/油本*/大須賀
将来構想.....	岩下/宇山/仙石/長縄	研究所一般公開.....	地田*/ウルフ
点検評価.....	仙石/長縄	その他諸行事企画.....	長縄/油本*
夏期シンポジウム.....	田畑/高橋/加藤/菊田/(後藤)	雑誌編集委員会.....	長縄/野町/ウルフ
冬期シンポジウム.....	仙石/菊田/油本		/越野/仙石
図書.....	仙石/兎内	<i>Acta Slavica Iaponica</i>	野町/ウルフ/大須賀
情報・広報.....	野町/菊田/高橋/大須賀	『スラヴ研究』.....	長縄/大須賀
予算.....	仙石	<i>Eurasia Border Review</i>	岩下
共同利用・共同研究公募.....	岩下	『境界研究』.....	地田
客員教員.....	山村	スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集	
外国人研究員プログラム.....	山村/ウルフ/大須賀	越野/大須賀
アイドゥカイテ.....	仙石	ニューズレター和文(メルマガ・HP コンテンツ)	
ベリッチ.....	野町	宇山/(田畑)/大須賀
バボシュ.....	仙石	ニューズレター欧文(メルマガ・HP コンテンツ)	
ウィートクロフト.....	ウルフ(田畑)	ウルフ/(田畑)/大須賀

* 助教5人で担当するなかでの代表者を示す。

◆ 人物往来 ◆

ニュース144号以降のセンター訪問者(客員、道央圏を除く)は以下の通りです(敬称略)。

[田畑/大須賀]

- 2月3日 Wang, Zhu (上海大、中国)
- 2月4日 Tulkin Atamurodov (世界経済外交大、ウズベキスタン)、Sanjar Kholbaev (同)
- 2月5日 平田武 (東北大)
- 2月8日 金野雄五 (みずほ総合研究所)
- 2月16日 笹山啓 (東京外国語大・院)
- 2月17日 岩本和久 (稚内北星学園大)、大平陽一 (天理大)、侘美俊輔 (稚内北星学園大)
- 2月19日 Kseniia Galiaeva (ウィレム・デ・クーニング・アカデミー、オランダ)
- 2月20-21日 井上貴子 (大東文化大)、深堀彩香 (愛知県立芸術大)、松川恭子 (甲南大)、村上志保 (立命館大)
- 2月24日 西芳実 (京都大)
- 2月27日 Rob Huebert (カルガリー大、カナダ)、Marc Lanteigne (ノルウェー国際関係研究所)、Andreas Østhagen (ノルウェー防衛研究所)、Katarzyna Zysk (同)、大西富士夫 (日本大)、佐久間寛 (東京外国語大)、深田淳太郎 (三重大)
- 3月14日 Aleksandr Duličenko (タルトゥー大、エストニア)
- 3月15日 Alexandre Bobrov (ロシア科学アカデミー文学研究所)、Anisava Miltenova (ブルガリア科学アカデミー文学研究所)、服部文昭 (京都大)、三浦清美 (電気通信大)、三谷恵子 (東京大)
- 3月23日 Kristian Feigelson (パリ第3・新ソルボンヌ大、フランス)
- 3月25日 望月哲男氏最終講義、送別会に道外からも多数の訪問者あり
- 3月28日 Robert Greenburg (オークランド大、ニュージーランド)
- 3月30日 服部文昭 (京都大)
- 4月21日 大崎果歩 (東京大・院)
- 5月14日 井上貴子 (大東文化大)、佐藤隆広 (神戸大)、田原史起 (東京大)、田引勝二 (ミネルヴァ書房)、山根聡 (大阪大)

* 研究員消息は次号に掲載します。

目 次

研究の最前線	1
2016 年度夏期国際シンポジウム“Russia’s Far North: The Contested Frontier” の予告／共同研究員／公開講座「スラブ・ユーラシア社会におけるジェンダー の諸相」開講中／アレクサンドル・ドゥリチェンコ教授の特別講演会／ロバ ート・グリーンバーグ教授の特別講義／Association for Borderlands Studies (ABS) リノ大会開催される／『境界研究』6号刊行／ <i>Eurasia Border Reviews</i> 6(1) 刊行 ／専任・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	9
望月哲男教授の退職と最終講義／助教の就任／非常勤研究員・博士研究員・学 術研究員紹介／2016年度の客員教授・准教授／事務職員の異動	
パミールの「ガラムチャシマ」と札幌の定山溪 by トヒル・カラダロフ	11
スラブ・ユーラシア研究センター 60 周年：ロシア・ユーラシア研究の 大きな挑戦 by ステファン・キルムゼ	
13	13
学界短信	15
学会カレンダー	
大学院だより	16
スラブ・ユーラシア研究センターで学んでほしい by 植松正明	
17	17
学生生活の最後の日 by 真弓浩明	
18	18
図書室だより	19
最近の受入資料から	
編集室だより	21
Slavic Eurasian Studies 30 <i>Perspectives on Contemporary East European Literature: Beyond National and Regional Frames</i> の刊行／「シリーズ・ユーラシア地域大国論」 第4巻『ユーラシア近代帝国と現代世界』（ミネルヴァ書房、2016年）の刊行 ／スラブ・ユーラシア叢書第12巻『北西ユーラシアの歴史空間：前近代ロシア と周辺世界』（北海道大学出版会、2016年）の刊行／『スラヴ研究』／ <i>Acta Slavica Iaponica</i>	
会議	23
センター協議委員会	
みせらねあ	24
センターの役割分担／人物往来	

2016年6月10日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	田畑伸一郎
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
